神の愛から生まれる一歩

奨励	立石 真崇〔たていし・まさたか〕
奨励者紹介	救世軍神戸小隊・泉尾小隊牧師

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

（ルカによる福音書　10章25―37節）

救世軍（The Salvation Army）と山室軍平

今日、私たちを祈りへと導いてくださった神様に感謝し、主にある挨拶をお送りします。神様の平和が私たちと共にありますように。

私にとって、同志社の今出川キャンパスをお訪ねするのは今日が初めてです。この機会が与えられたことを楽しみにしてきました。その理由の一つは、今ＮＨＫの大河ドラマで放送されている「八重の桜」の舞台を実際に訪ねることができるからです。しかしもっと大きな理由は、私が所属している教会の歴史をたどるときに、ある人物を通して同志社とのかかわりを見ることができるからです。

私が所属している教会は、救世軍（The Salvation Army）（ザ・サルベーション・アーミー）といいます。救世軍は、今から約１５０年前（１８６５年）、イギリスのロンドンにおいて、ウイリアム・ブース（１８２９―１９１２年）という牧師が、社会の底辺で苦しむ人びとのために伝道と慈善活動を行ったことから生まれた教派です。日本では１８９５年（明治28年）、イギリスから派遣された一団によって働きが始められ、現在に至っています。この救世軍に加わり、日本人で初めて救世軍の士官（牧師、伝道者）となった人が、山室（やまむろ）軍平（ぐんぺい）です。後に日本救世軍の指導者となって、伝道と奉仕の生涯を送りました。

山室は、青年時代に同志社で学びました。厳密にいえば彼は、卒業の年を迎える前に、学び舎を去っています。しかし、ここで過ごしたことは、彼にとって大切な経験であり、その後の生涯を形作る貴重な一部となりました。ちょうど、このクラーク・チャペルに入る手前、階段を上った所の壁に山室軍平のレリーフが掛けられており、彼がこの場所で学んだことが覚えられています。今日は、この山室軍平の生涯と同志社のかかわりを紹介しつつ、聖書の言葉から祈りの導きを得たいと願っています。

山室軍平と同志社、そして救世軍との出会いへ

山室軍平は１８７２年（明治５年）、岡山県阿哲郡本郷村（現在の新見市哲多町）の農家に生まれました。向学心の旺盛な少年で、14歳の時に家出同然に上京しました。東京では活版製造所の職工として働きながら、独学で学びました。15歳の時、キリスト教の路傍伝道に出会い、聖書の言葉に心を打たれたことがきっかけで、山室は教会に出席するようになり、イエス・キリストを信じました。

信仰をもった山室にとって、意味深い出来事が二つありました。一つは、16歳の時に献身の願いをもったことです。山室は救われたという嬉しさから、職場の同僚を教会に誘いました。しかし、彼らは応じませんでした。キリスト教の話は肩が凝ると言うのです。山室自身も、「講壇のことばも、話も、また一切の態度も、大分一般民衆とかけ離れたところがあるように思われた。つまりキリスト教の講壇と一般民衆との間に、渡ることのできない隔たりがあるのではないかと感じられた」と、問題意識を覚えるようになります。そして彼は、「神と平民とのため」に自分の生涯を用いることを決心し、次のように祈りました。「ここで一緒に働いているような職工、労働者、その他一般の民衆に、聴いて分かるように福音を説き、読んで分かるように御教えを書きあらわす者として用いたまえ」。彼自身の表現で言えば「平民伝道」、すなわち一般の人びとに広く福音を伝えたいという願いが、彼の生涯のテーマとなりました。

もう一つの出来事は、彼が新島襄を知ったことです。山室が通う教会で講演会が行われ、当時の著名なジャーナリスト、徳富蘇峰が講師として招かれました。その講演のなかで徳富は、新島襄を人格者として紹介しました。この話に山室は大変心を打たれ、新島先生にお会いしたい、高貴な品行の感化を受けたいと強く憧れるようになりました。折しも１８８９年（明治22年）、同志社を会場にして青年キリスト信徒を対象にした夏期聖書学校が開催されることとなり、これに山室は参加しました。実際に新島襄の話を聞くことも叶い、彼は「わたしの心の眼を開く機会であった…まるで井の中のかわずが大海に出たような気がした…」と振り返っています。感激もそのままに、山室軍平は同じ年の秋、同志社に入学しました（山室17歳）。

山室は入学したものの、経済的に十分な見通しをもっていませんでした。神の守りを信じてのことでしたが、実際には苦しい生活が続きました。その彼を助けたのが、先の夏期学校で知り合った上級生の吉田清太郎です。愛の教えと呼ばれる新約聖書のコリントの信徒への手紙一第13章を繰り返し読み、愛を実践することを祈っていた吉田は、山室の苦学を知って手を差し伸べます。自分の本を売り、あるいは牛乳配達のアルバイトをするなどして、山室の学費を工面しました。そのため、彼自身もひもじい思いをし、ある時は御所にあった椋の木の実を食べ、またある時は御所の池で死んでいた猫を、神様から与えられた糧だと食用にして飢えをしのいだという逸話も残っています。同志社における山室の背後には、自分自身を犠牲にして支えた吉田清太郎のような友情と励ましがあったのです。

しかしながら、山室は実際の生活の苦しさに加えて、信仰上の苦しみも味わうようになりました。「これまでのキリスト教が、とかく実際生活に対しての注意を欠いているのではないか」という疑問、「次第に社会の実情を知るにつれて、この世には単に講壇からの説教や、演説だけでは、救われない人びとが、多くいる」という問題意識が深まりました。悩みのうちに彼は同志社を去り、約５年間の学校生活は終わりました（１８９４年、山室22歳）。

同志社を去った山室は、神と平民のために仕える新しい道を模索して、しばらく転々とした生活を送りました。その彼に転機をもたらしたのが、岡山孤児院を創設した、日本のキリスト教福祉の先駆けである石井十次との交流でした。山室は同志社在学中に石井と知り合い、同志社を去った後しばらく彼の下で働いたこともありました。１８９５年（明治28年）の秋、石井は山室に救世軍が日本に来たことを話し、自分の代わりに訪ねてほしいと頼みました。石井の依頼を受けて救世軍を訪ねた山室は、信仰と実践を簡単明瞭に結び合わせて説く彼らの姿勢に非常に共感を覚えました。そして、ここが自分の人生を賭ける場所であると確信し、救世軍に加わりました（山室24歳）。このことを知った石井は、山室が「多年さがしていた合鍵をやっと見いだしたのである」と祝福したということです。その後、山室は68歳で天に召されるまで、救世軍の伝道者として歩みました。また、その働きは救世軍の枠を超えて、明治・大正・戦前の昭和にわたり、日本のキリスト教会の伝道と福祉の一翼を担うものとなりました。

しかし、山室は順調に同志社で学問を修め、人脈を築き、業績を積み重ねて、人生をつくり上げたというわけではありませんでした。むしろ、苦しみ・悩み・行き詰まりや自分の弱さを味わい、さまよいました。しかし、その彼に手を差し伸べる信仰の友がいて、彼は支えられ、立ち上がることができました。彼は救世軍を通して苦しむ人びとの隣人であろうとしましたが、その原点には、隣人となって自分にかかわってくれた人びとの存在があったということが言えます。そこに山室が同志社を通して得た宝があると思います。

「善きサマリア人」の譬え

今日の聖書の箇所には、イエス・キリストが語られた「善きサマリア人」の譬（たと）えが記されています。律法の専門家が「何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と、イエスに質問しました（25節）。ここで律法の専門家が関心を寄せているのは、永遠の命、神に受け入れられる命です。神にも認めてもらえるような価値ある人生です。ただし、この質問は、「イエスを試そうとして」発せられたものであり、この後に「彼は自分を正当化しようと」したと記されています（25、29節）。彼はイエスに問う前から、自分が神に認められるように生きてきた、価値ある人生を手にしているという確信がすでにあったのだと思います。

ところがイエスは、律法の専門家の質問に直接には答えられません。むしろ、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と、問いを返されました（26節）。そして、神を愛し、隣人を愛しなさいという律法を取りあげて、「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」とお答えになりました（28節）。「命が得られる」という表現は、元の言葉を直訳すれば、「あなたはそのことによって生きることができるだろう」という意味です。イエスがなさろうとしていることは、これまでの人生に評価をつけることではなく、これからどのように生きるのかに目を向けさせることであったのです。イエスが語られた譬えの内容は、律法の専門家はもちろん、周囲で聞いていたであろうユダヤ人にとっては驚くものでした。歴史的に複雑な経緯があり、ユダヤ人にとってサマリア人は宗教的に汚れた異邦人であり、互いに反目する存在だったからです。そのサマリア人が、傷

ついた旅人を助けたというのです。同じユダヤ人であり、信仰の手本であるはずの祭司やレビ人も顧みない状況のなかで、ただ憐れみの心から、サマリア人は旅人に手を差し伸べました。それが隣人になることだと言われるのです。

律法の専門家は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と問いました（29節）。しかし、ここでも彼の関心は相手の人ではありません。あくまでも自分が積み上げてきた人生の評価なのです。そこで隣人はだれかと考えたとしても、その相手は自分の人生を完成させる部品のような存在でしかないことでしょう。これに対してイエスは、サマリア人の姿を示して、ただ相手のことを思って隣人となる生き方があるのだ、それでこそ律法に記されている神への愛、また隣人への愛が現実のものとなって、その人を生かしていくのだ、と教えられたのです。

神の愛から生まれる
新しい一歩

私は今日の祈りの時のために、この御言葉を何度も読み返しました。そして、「行って、あなたも同じようにしなさい」という言葉が私の心の中で響いていました。ここでイエスは、新しい一歩を踏み出すようにと招いておられるのだということを、改めて考えさせられました。律法の専門家は、自分の満足のいく生活を歩んできたのでしょう。しかし、イエスの招きは、その満足した状態から一歩踏み出しなさいと挑戦するのです。ただし、このことは人間の意志や努力の問題として語られているのではありません。ここで使われている「憐れ」という言葉は、ルカによる福音書のなかで、この譬えを合わせて３度使用されていますが、他の２回は神またはイエス・キリストについて用いられています。すなわち、この「憐れ」は、何よりもまず神が人間に対して抱いておられる心であるのです。ときに弱く、傷つき、痛む人間、あるいは自分で自分を正当化し、自分が自分の命、人生に評価を付けて満足しようとする人間に対して、神ご自身が憐れみの心をもっておられ、旅人に駆け寄るサマリア人のように、私たちのところに走り寄り、手を差し伸べてくださったのです。イエス・キリストがこの世に来られたこと、十字架の上で命を犠牲にされたことは、神ご自身が新しい一歩を踏み出してくださって、私たちのところに来てくださり、隣人となってくださったという、何よりの証しなのです。自らも新しい一歩を踏み出して私たちのところに来られたイエスに招かれて、私たちも応答し、新しく歩み出すことができる。これは自分で自己を実現することとは異なる、新しい自分を神から受け取るという出来事でもあるとも言えるでしょう。そのような神の招きを、聖書は今も私たちに届けているのです。

イエス・キリストの招きに示された神の憐れみ、深い愛の心が、キリスト者を生み出し、新しい歩みを導き、また教会の祈りと業を育んできました。そのなかで、この学び舎も生まれ、今日があります。今この時も、いろいろな状況や思いをもって学生の皆さんがキャンパスで過ごしておられると思います。充実して一つひとつ願っていることを達成し、充実感に満ちている方もおられるでしょう。あるいは、道を探しても見えない、もどかしい思いを抱いている方もおられるかもしれません。しかし、私たちがどこに立つとしても、神の心は私たちに向かっています。「今いるところから新しい一歩を踏み出しなさい。神と共に、人と共に生きる新しい一歩を進みなさい」と呼びかけてくださるイエス・キリストが、ここにおられることを覚え、今日の歩みに神様の祝福と導きを祈り求めましょう。

〔参考文献〕
●山室軍平『私の青年時代』、救世軍出版供給部、一九七三年（第８版、初版一九二九年）
●救世軍機関誌『ときのこゑ』、第八七〇号（昭和七年七月一日号）～山室軍平「還暦を迎へて」
●同、第八七一号（昭和七年七月一五日号）～山室軍平「新島八重子刀自（弔説教の大意）」
●同、第一〇〇一号（昭和一二年一二月一五日号）～山室軍平「奉教五十年の思出」

2013年10月30日　同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録